

豫楽院 近衛家熙公年譜稿（四）

緑川明憲

本稿は、前号『京都大学國文學論叢』第二十五号）所載の蕪稿「豫楽院 近衛家熙公年譜稿（三）」の続きである。凡例については、『京都大学國文學論叢』第二十三号及び第二十五号を参照されたい。

〔附記〕

この年譜の作成にあたり、資料などの閲覧を常に快く認めて下さいます、財団法人陽明文庫 文庫長の名和修先生に厚く御礼申し上げます。

享保二年（二七二七）丁酉 五十一歳

従一位

●一月二十三日、御茶湯始。客は刑部大輔進藤長之及び久田宗也。（御茶湯）

●一月二十七日、茶の湯を催す。客は治部大輔今大路孝在及び藏人錦小路頼庸。（頼庸）

●二月八日、茶の湯を催す。客は大随道機及び百拙元養。（御茶湯）

●三月三日、茶の湯を催す。客は成身院英算及び百拙元養。（御茶湯）

●三月七日、息子の益君とともに鷹司家（火災で焼失していたため、この時建築中）へ出掛け、前関白鷹司兼熙と対面。享保元年に益君を養子とし、鷹司家を相続させたい旨が伝えられていたが、屋敷が未完成のため、当分近衛邸で暮らすように申し入れられる。（基熙・秘鈔）

●三月二十日、午下刻、上岡崎の藏人錦小路頼庸別業での茶の湯に参加。相伴は刑部大輔進藤長之及び石見守中川長堅。（頼庸）

●四月十四日、園城寺より依頼された三十六歌仙色紙形の草案が完成、基熙に見せる。（基熙）

●五月二日、今出川の近衛家本邸大書院で、摂津・上ノ太子東福院の宝物が開帳。これに関連し、自筆の『般若心経』及び白銀二枚を贈る。（雑事日記）

●五月二十六日、『般若心経』を行草体で書写。（個人蔵）

●六月三日、園城寺千団子社の拝殿に掲げる『三十六歌仙』（絵は画所預の左近衛将監土佐光芳筆）書写の礼として、昆布十本及び唐紙などが贈られる。（秘鈔）

●六月十五日、息子の音君、三宝院門跡房演（鷹司房輔の息子）の附弟となることが決定。（秘鈔）

●七月十二日、茶の湯を催す。客は岡崎藩主で京都所司代の和泉守水野忠之・禁裏附（中御門院）武士の伊勢守久留正清・同丹後守小宮山昌方。（御茶湯）

●八月十三日、茶の湯を催す。客は刑部大輔進藤長之及び治部大輔今大路孝在。（御茶湯）

●八月二十九日、不空羼索觀世音像（当時の極めでは空海作とされた）を入手した安禅寺の深賢へ、作成するように命じていた厨子（費用は金二十五両。家熙をはじめとする近衛家の人々より寄進）が完成。この日に初めて礼拝。安禅寺は御所石薬師御門の東南にあった寺院。（基熙・秘鈔・センチュリー文化財団蔵『不空羼索觀世音靈像記』・碓井小三郎氏『京都坊目誌』・蕪稿「近衛家熙筆『不空羼索觀世音菩薩靈像記』をめぐって」）

●九月一日、宇治郡五ヶ庄岡屋村の西方寺（現宇治市五ヶ庄大林）が所蔵する近衛信尋筆『西方寺縁起』（寛永十六年ごろの書写か）一巻の軸や表紙などを修復し、奥書を書写して再び奉納。（秘鈔）

●九月三日、茶の湯を催す。客は京都東町奉行の安房守山口直重及び大工頭の中井主水正豊。（御茶湯）

●九月四日、茶の湯を催す。客は弘前藩側用人の佐藤帯刀・弘前藩士の大石庄司・刑部大輔進藤長之。（御茶湯・青森県人名大事典）

●九月十日、『金剛般若經』を楷書体で書写。（『近衛家熙公遺墨展覽会目録』）

●九月十九日、安禅寺で不空羼索觀世音像の開眼供養が行われる。この時、『不空羼索神呪心經』一卷に加え、深賢が觀世音像を入手した経緯などを書写したもの（『不空羼索觀世音靈像記』と

命名。奥書「享保丁酉秋九月十九日／從一位家熙誌」と白銀二枚を奉納。（秘鈔）『不空羼索觀世音靈像記』は、文政二年ごろに墨拓本として出版（跋は近衛家諸大夫の織部正佐竹重勝）。（センチュリー文化財団蔵『不空羼索觀世音靈像記』・蕪稿「近衛家熙筆『不空羼索觀世音菩薩靈像記』をめぐって」）

●十月五日、口切りの茶の湯を催す。客は刑部大輔進藤長之及び久田宗也。（御茶湯）

●十月八日、安禅寺へ出掛ける。夕食を摂り帰宅。（頼庸）

●十月十九日、茶の湯を催す。客は石井宗顔及び鴻池道億。（御茶湯）

●十月二十九日、茶の湯を催す。客は「前殿下様」（前関白鷹司兼熙であろう）・参議町尻兼量・鷹司家諸大夫の宮内大輔牧義広。牧義広には近衛家司斎藤家と縁戚関係があったことが認められる。（御茶湯ほか）

●十一月三日、茶の湯を催す。客は村上宗伯及び久米元察。（御茶湯）

●十一月五日、茶の湯を催す。客は吉田右近及び治部大輔今大路孝在。（御茶湯）

●十二月一日、茶の湯を催す。客は老中の和泉守水野忠之・京都東町奉行の安房守山口直重・禁裏（中御門院）附武士の伊勢守久留正清。（御茶湯）水野忠之はこの年九月二十七日に老中に任ぜられており、江戸へ下向する直前に招かれたものと思われる。このち、忠之は勝手掛の老中として享保の改革を支えた。

●十二月十一日、茶の湯を催す。客は権大納言坊城俊清及び風早中納言（公長か。ただしこの時前参議）。（御茶湯）

●十二月十九日、茶の湯を催す。客は成身院英算及び治部大輔今大路孝在。(御茶湯)

享保三年(二七一八)戊戌 五十二歳 従一位

●一月七日、御茶湯始。客は刑部大輔進藤長之・久米元察・久田宗也。(御茶湯)

●一月二十五日、茶の湯を催す。客は禁裏(中御門院)附武士の伊勢守久留正清及び仙洞(靈元院)附武士の伊予守長崎元仲。(御茶湯)

●二月九日、茶の湯を催す。客は京都東町奉行の安房守山口直重・同西町奉行の肥後守諏訪頼篤・禁裏御典医の養寿院法眼山脇道立。(御茶湯) 山脇道立は腑分けをしたことで著名な医師

山脇東洋の養父。当時堀川通丸太町上ルに住まいし、禁裏と將軍家より扶持を与えられていた。

●二月二十四日、茶の湯を催す。客は深諦院・刑部大輔進藤長之・久田宗也。(御茶湯)

●二月二十七日、茶の湯を催す。客は禁裏御典医の鍼医御菌意齋常倫・小児科医の保寿院法眼山科道安・久米元察。(御茶湯)

御菌家は初代が天正年間に京で鍼医を開業、以後代々の職とする。意齋常倫は靈元院の厚遇を受け法眼となり、十人扶持を与えられた。晩年は茶事に凝る生活を送ったという。一方、山科

道安は当時柳馬場通二条下ルに住まいした。遠州流の茶人でもあるが、のちに家熙を茶の湯の師としている。(槐記・寺田貞

次氏『京都名家墳墓録』・『京都御役所向大概覚書』ほか)

●二月、唐様書家細井広沢の墨拓本『大極帖』が出版。標題の「原始墨本晦庵真蹟／享保三年夾鐘日書」(細井九阜の『二老

略伝』では「原」を「源」とする)を八分書で書写。(『二老略伝』・三村清三郎『近世能書伝』)

●三月四日、茶の湯を催す。客は藏人錦小路頼庸及び左馬頭進藤長富。(御茶湯)

●五月二十八日、茶の湯を催す。客は刑部大輔進藤長之及び久田宗也。(御茶湯)

●六月一日、茶の湯を催す。客は成身院英算及び左馬頭進藤長富。(御茶湯)

●六月十一日、娘の安己君、尾張藩主の権中納言徳川継友と結婚。(『徳川諸家系譜』)

●七月二十八日、安己君結婚の祝儀として、將軍徳川吉宗へ縮緬十卷・二種一荷・金馬代を贈る。(実紀)

●九月九日、茶の湯を催す。客は仙洞(靈元院)附武士の伊予守長崎元仲及び御菌意齋。(御茶湯)

●閏十月七日、口切りの茶の湯を催す。客は村上宗伯及び久米元察。(御茶湯)

●閏十月十一日、茶の湯を催す。客は刑部大輔進藤長之及び久田宗也。(御茶湯)

●閏十月十四日、茶の湯を催す。客は吉田右近及び治部大輔今大路孝在。(御茶湯)

●閏十月十六日、茶の湯を催す。客は法金剛院照山及び鴻池道億。(御茶湯)

●閏十月十八日、茶の湯を催す。客は藏人錦小路頼庸及び左馬頭進藤長富。(御茶湯)

●十一月七日、茶の湯を催す。客は深諦院及び久米元察。(御茶湯)

●十一月十三日、茶の湯を催す。客は御菌意斎・山科道安・外科医の法橋山本恕軒。(御茶湯ほか)

●冬、笛の銘に「和珍」と名付ける。「和珍」爨桐為琴、椽竹為／笛皆得遇知音者然／此古竹不知／為何用出何処偶得／大王一願為笛貴重／之班固日和氏之璧／隋侯之珠先賤而後／貴者和隋之宝也於／此笛亦言因名日和珍／享保戊戌冬日／西岸虛舟子書」(陽明文庫藏／函架番号八九五三九)

享保四年(一七一九)己亥 五十三歳

従一位

●一月七日、御茶湯始。客は刑部大輔進藤長之・久米元察・久田宗也。(御茶湯)

●一月二十四日、前関白鷹司兼熙の養子となった息子の益君が元服し、房熙と改名。(基熙)

●二月四日、いわゆる「忠臣蔵」として著名な内匠頭浅野長矩の旧臣四十七名の十七回忌法要が西王寺など三ヶ寺で行われ、近衛家より白銀一枚ずつを奉納。近衛家の特旨で旧赤穂藩士の位牌も作られた。西王寺に現存。(西王寺閑栖の滝全隆猊下御教示・秘鈔)

●二月十九日、午半刻、上岡崎の藏人錦小路頼庸別業に、深諦院及び刑部大輔進藤長之たちと出掛ける。(頼庸)

●二月二十八日、茶の湯を催す。客は京都代官の小堀仁右衛門克敬及び近江・坂田郡代官の角倉与一玄懷(角倉素庵の玄孫)。玄懷は正徳二年九月の河原御殿普請に携わっており、家熙との交流はこのあたりから始まるか。(御茶湯ほか)

●三月二十九日、『江家次第』の講釈を行う。受講者は藏人錦小路頼庸及び新藏人(北小路俊在か)たち。講釈は四月十一日

にも行った。(頼庸)

●三月、刑部大輔進藤長之及び基熙附諸大夫の大藏大輔進藤泰通(輪王寺宮諸大夫進藤長昌の長男。長之の実兄)が、進藤長泰(明応六年三月三日に任筑後守)を中興の祖とする進藤家の系図を新たに作成。この新系図に奥書を書写。下書きが陽明文庫に現存。(陽明文庫藏／函架番号八九五四〇・『地下家伝』ほか)

●五月十二日、願証院貞誉松心大姉(前関白鷹司兼熙室)の法要に際し、『妙法蓮華経』一部を嵯峨の二尊院(鷹司家菩提寺)へ奉納。(雑事日記ほか)

●五月二十八日、御風炉始。客は京都東町奉行の安房守山口直重・同西町奉行の肥後守諏訪頼篤・大工頭の中井主水正豊。(御茶湯)

●六月一日、午下刻、刑部大輔進藤長之が所有する「河原之新宅」での茶の湯に参加。相伴は治部大輔今大路孝在及び藏人錦小路頼庸。(頼庸)

●六月、『玉海』の奥書を書写。「関玉海一書類明清之際所補刻而／至正本殊無伝重刊之弊屢為舛／謬漫漶脱漏亦復不少惟明代初刻／本書不存補刻者付年之二耳字画古／雅剗刷最精今回康熙所補而參之／其初刻者凡一再校勘以完訂其終／始但両本共欠者姑存而俟異日／享保己亥歳林鍾日／従一位家熙誌」(陽明文庫藏／函架番号八九五二四)

●六月、陶淵明『帰去来辞』を行草体で書写。のちに墨拓本として出版。(センチュリー文化財団蔵)

●七月九日、藏人錦小路頼庸より中元として雉二羽を贈られる。(頼庸)

●七月二十一日、女御尚子の懷妊が伝えられる。産屋は今出川の近衛家本邸の本殿が当てられることが決定。(基熙)

●八月五日、藏人錦小路頼庸を介し、久保三郎兵衛より「宗和棗」を贈られる。(頼庸) 宗和とは金森宗和のことであろう。宗和は家熙の茶の湯の師常修院宮慈胤親王の師であり、また、家熙との関係が非常に深い後西院も宗和流の茶に傾倒した。(谷端昭夫氏『近世茶道史』・『角川茶道大事典』)

●九月十七日、岡崎で茶の湯を催す。客は百拙元養・月船淨潭(百拙元養の弟子。のち海雲山法蔵寺二世)・刑部大輔進藤長之。(御茶湯・『黄檗文化人名辞典』)

●十月三日、口切りの茶の湯を催す。客は刑部大輔進藤長之及び久田宗也。(御茶湯) 同日、琉球人の程順則を介して清・閩南の儒者王登瀛に揮毫を依頼していた自邸「物外楼」の額字が届き、物外楼に掛ける。程順則(名護親方)は天和三年より四年間、清国の閩に滞在経験があり、王登瀛との交流はこのあたりから生まれたか。(秘鈔・『日本近世人名辞典』)

●十月十日、茶の湯を催す。客は成身院英算及び一乗院宮坊官の法印内侍原恭専。(御茶湯) 内侍原家は祖とされる按察使法眼好専が、大塔宮尊雲(護良)親王が熊野に落去する際に五百余騎を率いて護衛したと伝えられ、その後は代々一乗院に坊官として仕えた。『地下家伝』・国立公文書館蔵『雲上当時鈔』・奈良県立図書情報館蔵『一乗院門跡坊官諸大夫侍家伝』

●十月十四日、午半刻、上岡崎の藏人錦小路頼庸別業での茶の湯に参加。(頼庸)

●十月十六日、茶の湯を催す。客は村上宗伯及び山科道安。(御茶湯)

●十月二十五日、茶の湯を催す。客は深諦院及び左馬頭進藤長富。(御茶湯)

●十月二十七日、三本木の刑部大輔進藤長之宅での茶の湯に参加。相伴は治部大輔今大路孝在及び藏人錦小路頼庸。茶後に謡があった。(頼庸)

●十一月月上旬、明・左圭撰『百川学海』の奥書を書写。「百川学海三十一卷即左圭之原本是也与今世布行者大有径庭也近說郭／卷内鈔書數十種以甲乙選次簽日百／川学海固非禹錫袁輯者也茲能認其／真偽而欲令勿治非之惑耳／享保己亥暢月上漸從一位家熙記」(陽明文庫蔵／函架番号八九五二三)

●十一月十日、茶の湯を催す。客は法金剛院照山及び鴻池道億。(御茶湯)

●十一月十三日、茶の湯を催す。客は京都東町奉行の安房守山口直重・同西町奉行の肥後守諏訪頼篤・大工頭の中井主水正豊。(御茶湯)

●十一月十四日、午半刻、茶の湯を催す。客は前権中納言外山光顕及び藏人錦小路頼庸。(御茶湯・頼庸)

●十一月二十日、「風氣」により、藏人錦小路頼庸より見舞いとして梅花一枝を贈られる。十一月末日ごろまで病気のため籠居していた。(頼庸)

●十二月十七日、五色の料紙に『妙法蓮華経』『普門品』を楷書体で書写。『近衛家熙公遺墨展覧会目録』

享保五年(二七二〇)庚子 五十四歳 従一位

●一月一日、子半刻、中御門院に第一皇子降誕、母は中御門院女御の尚子。幼名は若宮(昭仁親王。のちの桜町院。家熙の外

孫にあたる)。出産に立ち会った医師は浦野道英・村上宗伯・北小路大膳亮・高木英淳・山科宗安の五名。また、皇子降誕に際し、藏人錦小路頼庸が「寄代之驗者」という近江の僧千寿院に安産の祈禱を依頼。家熙は先例に倣い、若宮誕生後に赤飯などを祝儀として本邸に贈った。(基熙・頼庸・『近衛家取次所日記』)

●一月八日、若宮御七夜の祝儀として、近衛家内の人々へ白銀二十枚を贈る。(『近衛家取次所日記』)

●一月十五日、若宮降誕における家熙への祝儀(將軍徳川吉宗より太刀一振及び銀五十枚)が、江戸を發つ。(実紀)

●一月十六日、若宮降誕の祝儀のため、上田藩主で京都所司代の伊賀守松平忠周が近衛家本邸に来邸し、寢殿で対面。(『近衛家取次所日記』) 同日、夜頃から尚子の容態が悪化。(頼庸)

●一月二十日、寅刻、尚子の容態がさらに悪化。医師の北小路大膳亮が治療にあたり、僧千寿院が加持祈禱を行う。酉刻、尚子に准后宣下、「新中和門院」の女院号が贈られる。亥半刻、本殿において薨去、享年十九。(基熙・『近衛家取次所日記』・『陽明家系譜』・頼庸)

●一月二十六日、近衛家へ幕府より尚子薨去の弔意を伝えられる。(実紀)

●一月二十八日、家熙の希望により、尚子の位牌の清書を三宝院門跡房演に依頼。また、四門額の清書は三位持明院基雄に依頼。(『近衛家取次所日記』)

●二月六日、尚子の葬儀に左馬頭進藤長富を参加させる。(『近衛家取次所日記』)

●二月八日、尚子の葬送に関与した近衛家諸大夫の縫殿助北小

路俊里・同隠岐守渡辺珍化・津田志摩守(瀧口か)らへ羊羹十棹を贈る。(『近衛家取次所日記』) 同日、藏人錦小路頼庸より土佐麩を贈られる。(頼庸)

●三月二十日、家熙の沙汰により、大徳寺で尚子の法要が行われる。(頼庸)

●三月二十七日、九ツ、今出川の近衛家本邸の奥へ出掛ける。諸方面に配る尚子の遺物分けの品を吟味。同日、中御門院より「御産殿之為御挨拶」として、新銀五十枚及び生鯛一折を贈られる。(『近衛家取次所日記』)

●四月七日、若宮降誕を祝うため高家の左京大夫吉良義俊が上洛、太刀馬代銀五十枚を贈られる。(頼庸)

●四月十二日、般舟院へ送る新中和門院の位牌の銘が金紙に書かれていたが、先例では白紙に書いているため書き直しを命ずる。(『近衛家取次所日記』)

●五月七日、この年初めての参内。(頼庸)

●五月九日、刑部大輔進藤長之宅での茶の湯に参加。相伴は藏人錦小路頼庸。(頼庸)

●七月十一日、鹿兒島藩主島津家より基熙に依頼されていた「華尾権現」の額字の揮毫に關し、板や寸法などについて基熙より相談を受ける。額の裏書きは基熙に代わり家熙が書写。(基熙)

●九月十一日、若宮降誕の祝儀として、將軍徳川吉宗へ太刀馬代を贈る。(実紀)

●九月、宋・歐陽脩撰『秋声賦』を楷書体で書写。(昭和十一年刊影印本)

●十月七日、口切りの茶の湯を催す。客は刑部大輔進藤長之及び久田宗也。(御茶湯)

●十月十六日、午半刻、上岡崎の藏人錦小路頼庸別業での茶の湯に参加。相伴は石見守中川長堅。この時、狩野尚信筆「松之絵」及び楽焼の茶碗を称美したため、頼庸よりこの二点を贈られる。(頼庸)

●十月十九日、茶の湯を催す。客は裏千家六世の六閑斎千宗安及び久米元察。(御茶湯)

●十月二十九日、茶の湯を催す。客は深諦院及び山科道安。(御茶湯)

●十一月六日、茶の湯を催す。客は一乗院宮尊昭親王及び一乗院宮諸大夫の上総介中沼秀延。(御茶湯) 中沼家の中興の祖先京亮元知(旧名は喜多川与作)は三藐院近衛信尹に仕え、十二歳の時に中沼の旧号をもつて一乗院宮に取り立てられた。(熊倉功夫氏『小堀遠州茶友録』) 同日、藏人錦小路頼庸へ、十月十六日の献上物の返礼として縮緬一卷及び金二百疋を贈る。(頼庸)

●十一月十二日、茶の湯を催す。客は吉田右近及び治部大輔今大路孝在。(御茶湯)

●十二月十一日、茶の湯を催す。客は村上宗伯・久米元察・山科道安。(御茶湯)

★此年、新中和門院尚子の追善のため、自筆の観世音菩薩名号一幅を宇治・五ヶ庄岡屋村の西方寺へ奉納。(秘鈔)

★此年、男児誕生、母は家熙附女房の吉岡局。幼名は保君。(秘鈔)

享保六年(一七二二)辛丑 五十五歳

従一位

●一月七日、御茶湯始。客は刑部大輔進藤長之・久米元察・久

田宗也。(御茶湯)

●一月、歳旦の詩「辛丑元旦」を賦す。試筆(書き初め)が現存。「淑気雨調昨夜来、扶桑日上瑞雲開、四時万象初生日、春色春催十里梅」、落款「物外楼主人」(個人蔵)

●二月二日、茶の湯を催す。客は一乗院宮尊昭親王・法印内侍原恭専・上総介中沼秀延。(御茶湯)

●二月七日、茶の湯を催す。客は藏人錦小路頼庸・山本宗林・刑部大輔進藤長之。(御茶湯・頼庸)

●二月十九日、茶の湯を催す。客は宮内大輔牧義広及び左馬頭進藤長富。(御茶湯)

●三月十一日、梨木町の左馬頭進藤長富宅での茶の湯に参加。相伴は藏人錦小路頼庸。(頼庸)

●三月十五日、茶の湯を催す。客は法金剛院照山及び北野・正林寺住持の了岳。(御茶湯ほか)

●三月十八日、十二日に誕生した孫娘に「八世君」と名付ける。(基熙)

●三月二十九日、茶の湯を催す。客は百拙元養及び月船浄潭。(御茶湯)

●四月十日、王元章(元代の画家)筆「梅絵讃」掛物を金三十両で購入。この「梅絵讃」は、享保十三年十月二十七日などの茶事で用いられている。(槐記・頼庸ほか)

●四月十一日前後、徳大寺公全(享保四年十二月二日薨)室で長女の姫君、容態が悪化。(頼庸)

●四月二十三日、長女の姫君没、享年三十六。法号、靈性院慈空了慧大姉。徳大寺家菩提寺の十念寺に葬られる。(基熙ほか)

●五月四日、藏人錦小路頼庸より梅醬を贈られる。(頼庸)

●六月二十二日、三本木の刑部大輔進藤長之宅での茶の湯に参加。相伴は藏人錦小路頼庸。(頼庸)

●八月五日、午半刻、上岡崎の藏人錦小路頼庸別業での茶の湯に参加。相伴は刑部大輔進藤長之。申刻に終わり、そのまま下岡崎の家熙別業「又得庵」(百拙元養が管理)へ出掛ける。又得庵の「得」の字については、他の字をあてることがある。(頼庸・大槻幹郎氏「画僧百拙について」ほか)

●八月十四日、奈良・談山の地生院より所望されていた『維摩經』が完成、基熙へ見せる。外題は基熙筆。(基熙)

●九月八日、百拙元養を介して内々に参議烏丸光榮より所望されていた「詩之中字」(詳細不明)を書写、藏人錦小路頼庸を介して光榮に贈る。(頼庸)

●十月十九日、口切りの茶の湯を催す。客は刑部大輔進藤長之及び久田宗也。(御茶湯)

●十月二十二日、茶の湯を催す。客は娘で三時知恩寺門跡の尊融尼及び尼僧の永昌院禅尼。(御茶湯ほか)

●十月二十四日、刑部大輔進藤長之の宿所での茶の湯に参加。相伴は深諦院及び藏人錦小路頼庸。(頼庸)

●十月二十六日、『般若心経』を行書体で書写。(陽明輝光第三輯『豫楽院筆三体心経』)

●十月二十七日、茶の湯を催す。客は御菌意斎及び久米元察。(御茶湯)

●十月二十八日、茶の湯を催す。客は藏人錦小路頼庸及び左馬頭進藤長富。(御茶湯)

●十月二十九日、茶の湯を催す。客は正林寺住持の了岳及び西王寺六世住持の九峯自端。(御茶湯) 九峯自端は古筆本家五世

了珉の三男。古筆の鑑定もよくした。『更衣山西王禅寺記』
●十一月一日、茶の湯を催す。客は深諦院及び山科道安。(御茶湯)

●十一月五日、上岡崎の藏人錦小路頼庸別業での茶の湯に参加。相伴は刑部大輔進藤長之及び石見守中川長堅。(頼庸)

●十一月十三日、茶の湯を催す。客は村上宗伯・医師の登春院法印上田養安・山科道安。(御茶湯・『京都御役所向大概覚書』)

●十一月二十五日、茶の湯を催す。客は参議風早公長及び左中将桜井氏敦。(御茶湯)

●十一月二十七日、左馬頭進藤長富宅での茶の湯に参加。相伴は治部大輔今大路孝在及び藏人錦小路頼庸。(頼庸)

●十二月一日、茶の湯を催す。客は前権大納言坊城俊清及び前権中納言六条有藤。(御茶湯)

●十二月五日、茶の湯を催す。客は吉田右近及び治部大輔今大路孝在。(御茶湯)

●十二月八日、藏人錦小路頼庸の有卦入りに際し、青磁の香炉及び蒔絵の箱を贈る。(頼庸)

●十二月二十三日、仙台藩主伊達家より、連歌師猪苗代兼竹を介し、歳暮として鴨五羽を贈られる。(綿拔豊昭氏『猪苗代家の研究』)

●冬、中国式の絵画『兒童遊戲図』『嬰兒図』を揮毫。この図は宋・馬麟筆『嬰兒図』の構成と非常に似ており、あるいはこの絵から着想したものと思われる。(遺墨・近衛公爵御蔵器第一回入札目録)

★此年前後、『唐六典』の校合及び板行を思い立つ。(槐記)

享保七年(一七二二)壬寅 五十六歳

従一位

●一月七日、御茶湯始。客は刑部大輔進藤長之・久米元察・久田宗也。(御茶湯)

●一月二十九日、茶の湯を催す。客は法金剛院照山及び治部大輔今大路孝在。(御茶湯)

●二月一日、茶の湯を催す。客は一乘院宮尊昭親王・法印内侍原恭専・富野乗因。(御茶湯)

●二月二十七日、息子の音君、三宝院門跡房演の附弟となり本坊へ入室。法号、実演。『門跡伝』

●二月三十日、茶の湯を催す。客は刑部大輔進藤長之・久米元察・久田宗也。(御茶湯)

●五月二十一日、かねてより所望していた唐本蔵経が長崎より到来。(基熙)

●六月五日、茶の湯を催す。客は藏人錦小路頼庸・山本宗林・刑部大輔進藤長之。(御茶湯)

●六月十三日、茶の湯を催す。客は久米元察及び左馬頭進藤長富。(御茶湯)

●九月十四日、亥半刻、基熙薨去、享年七十五。法号、応円満院悠山証岳。この月十八日より三日間廃朝、鳴物停止。(家譜・秘鈔・『続史愚抄』)

●九月二十四日、基熙、大徳寺の近衛家廟所へ葬られる。『続史愚抄』墓は西王寺にもある。

●九月三十日ごろ、女兒誕生、母は家熙附女房の於秀。幼名は房君。房君のちに東本願寺十七世法主真如光性の法嗣玄如光乗室となる。(雑事日記・『陽明家系譜』ほか)

●九月、東福寺不二庵所蔵の『画一元亀』(入明僧の策彦周良

が将来)の目録の跋を書写。(遺墨・『近衛家熙公遺墨展覧会目録』)

★此年、養子の辰君(基熙末子)、大覚寺へ入寺。法号、寛守。(京都国立博物館『嵯峨御所 大覚寺の名宝』展図録)

享保八年(一七二三)癸卯 五十七歳

従一位

●一月七日、御茶湯始。客は刑部大輔進藤長之・久米元察・久田宗也。「御佳例」(他所)によって、長之が上座で茶を賜っている。(御茶湯・他所)

●一月十日、茶の湯を催す。客は村上宗伯・上田養安・山科道安。(御茶湯)

●一月十九日、茶の湯を催す。客は九峯自端及び正林寺住持の了岳。(御茶湯)

●一月二十一日、茶の湯を催す。客は裏千家六世の六閑斎千宗安及び左馬頭進藤長富。(御茶湯)

●二月一日、茶の湯を催す。客は一乘院宮尊昭親王・興福寺院家の惣珠院・一乘院宮坊官の法印高天好章。(御茶湯ほか)

●二月二日、茶の湯を催す。客は法印内侍原恭専及び上総介中沼秀延。(御茶湯)

●三月二日、茶の湯を催す。客は法金剛院照山及び鴻池道億。(御茶湯)

●三月七日、西王寺での茶の湯に参加。亭主は九峯自端。相伴は藏人錦小路頼庸及び刑部大輔進藤長之。(他所)

●三月十二日、茶の湯を催す。客は山本恕軒及び藏人錦小路頼庸。(御茶湯)

●三月十三日、藏人錦小路頼庸邸での茶の湯に参加。亭主は久

米元察。相伴は頼庸及び刑部大輔進藤長之。(他所)

●三月十六日、河原御殿数寄屋での茶の湯に参加。亭主は久田宗也。相伴は藏人錦小路頼庸及び刑部大輔進藤長之。(他所)

●三月二十五日、藏人錦小路頼庸邸での茶の湯に参加。相伴は久田宗也及び刑部大輔進藤長之。(他所)

●四月一日、御風炉始。客は久米元察・刑部大輔進藤長之・久田宗也。(御茶湯)

●四月六日、茶の湯を催す。客は村上宗伯・上田養安・山科道安。(御茶湯)

●六月四日、自身の誕生日に当たり、今出川の近衛家本邸に詰める家司らにも餅や酒を振る舞う。(雑事日記)

●七月九日、鹿兒島藩京屋敷留守居役の向井四郎右衛門が来邸、御合力として金二百五十両及び米二百石を贈られる。(雑事日記)

●九月七日、男児誕生、母は吉岡局。幼名は律君。(秘鈔・槐記) 同日、弘前藩主の土佐守津輕信寿より金五百疋及び干鯛一箱を、その子京亮信興より干鯛一箱を、養女で信興室の綱君より生鯛二尾一箱をそれぞれ贈られる。(雑事日記)

●十月十日、河原御殿物外楼の数寄屋で口切りの茶の湯を催す。客は刑部大輔進藤長之・久米元察・久田宗也。この数寄屋はこの年修復が終わったばかりで、その様は「御物数寄、万事絶品綺麗也」(他所)。長之が数寄屋を「綺麗」と評している点は、家熙の茶風的一端を示すものとして注目すべきか。(御茶湯・他所)

同日、日向・佐土原藩(鹿兒島藩の支藩)藩主の但馬守島津忠雅より、家督相続の祝儀として一種を贈られる。(雑事日記)

●十月二十一日、茶の湯を催す。客は九峯自端及び正林寺住持の了岳。(御茶湯)

●十月二十二日、茶の湯を催す。客は右京権大夫錦小路頼庸(二十一日に任右京権大夫)・山本宗林・刑部大輔進藤長之。(御茶湯・他所ほか)

●十一月一日、上岡崎の右京権大夫錦小路頼庸別業での茶の湯に参加。亭主は山本宗林。相伴は頼庸及び刑部大輔進藤長之。(他所)

●十一月六日、西王寺での茶の湯に参加。亭主は九峯自端。相伴は近衛家司の広瀬外記(旧名幸助か。もと桜御所附の板元らしい。享保十二年一月に致仕)及び刑部大輔進藤長之。(他所ほか)

同日、金沢藩主の加賀守前田吉徳より太刀馬代金一枚・二種・樽代千疋を、また前藩主の参議前田綱紀より太刀馬代金一枚及び一種がそれぞれ贈られる。(雑事日記)

●十一月九日、茶の湯を催す。客は上田養安・山科道安・御園意斎。(御茶湯)

●十一月十五日、茶の湯を催す。客は裏千家六世の六閑斎千宗安及び左馬頭進藤長富。(御茶湯)

●十一月十六日、茶の湯を催す。客は深諦院及び刑部大輔進藤長之。(御茶湯・他所) 同日、水戸藩より借覧した『礼儀類典』全五百十巻の書写が終了。礼として、水戸藩主の参議徳川宗堯

へ後西院宸筆の御製和歌掛物一幅及び蝙蝠扇二本を、仲介した安積澹泊へ楽焼の茶碗及び香合を、近衛家との取次を行った水戸藩士の大井介右衛門・同小池源太右衛門へ飛紗綾二巻ずつを、直接の返却先である水戸藩京屋敷留守居役の荷見茂右衛門

へ鴨二羽をそれぞれ贈る。(雑事日記)

●十一月二十七日、今出川の近衛家本邸での茶の湯に参加。亭主を左馬頭進藤長富に命ずる。相伴は右京権大夫錦小路頼庸及び広瀬外記。(他所)

●十二月八日、茶の湯を催す。客は法金剛院照山及び太秦の自性院僧正。(御茶湯ほか)

●十二月十日、今出川の近衛家本邸詰の侍(元修理方)松井主殿宅での茶の湯に参加。亭主は深諦院(薄茶は松井主殿が点てる)。相伴は右京権大夫錦小路頼庸及び刑部大輔進藤長之。主殿は「日比茶数寄」と評されており、参加した家熙は「別而御感御気嫌能」く帰宅した。(他所)松井主殿は享保十四年二月十六日をもって仙石右門と交替し、本邸より河原御殿へ詰めるようになる。(雑事日記)

●十二月十二日、茶の湯を催す。客は吉田幸節及び治部大輔今大路孝在。吉田幸節はもと常修院宮に近侍した者で、この時は牢人していたという。幸節は茶事でこれまで登場した「吉田右近」と同一人物と考えられる。(御茶湯・他所)

●十二月十九日、茶の湯を催す。客は前権大納言坊城俊清・前権中納言六条有藤・三位高辻総長。(御茶湯)

●十二月二十九日、弘前藩主津軽家より御合力として金七十五両を贈られる。(雑事日記)

享保九年(一七二四)甲辰 五十八歳

従一位

●一月一日、歳旦の詩を二首賦す。「甲辰元旦／一室蕭然稀賀客、衣袍不改烏紗巾、窓前柳睡梅猶黙、穉子拳盃頻報春」、「又何独南院能楽貧、竹籬不隔一天春、登楼山色長随我、荣翼華樓還有隣」(槐記)

●一月四日、『槐記』の記述が開始。書き手は山科道安。(槐記)
●一月七日、御茶湯始。客は刑部大輔進藤長之・久米元察・久田宗也。(御茶湯・他所)

●二月一日、茶の湯を催す。客は一乗院宮尊昭親王及び上総介中沼秀延。(御茶湯)

●二月五日、河原御殿御座の間(数寄屋)での茶の湯に参加。亭主は治部大輔今大路孝在。相伴は右京権大夫錦小路頼庸及び刑部大輔進藤長之。(他所)

●二月二十二日、『考訂続日本紀』借覧を水戸藩主徳川家へ申し入れる。(雑事日記)

●三月十日、茶の湯を催す。客は治部大輔今大路孝在・石見守中川長堅・松井主殿。(御茶湯)

●閏四月二十日、御風炉始。客は百拙元養及び九峯自端。(御茶湯)

●閏四月二十四日、茶の湯を催す。客は久米元察・刑部大輔進藤長之・久田宗也。(御茶湯・他所)

●五月三日、朝、左馬頭進藤長富宅での茶の湯に参加。相伴は百拙元養・九峯自端・進藤夕翁(俗名は泰通)ら。(槐記)

●五月十九日、清国より新たに舶載された書籍の目録が到来。(槐記)

●五月、奈良・法華寺門跡高慶尼(享保七年十月二十五日寂)が読誦していた経に跋を書写。下書きが陽明文庫に現存。(陽明文庫蔵／函架番号八九五八九)

●五月以前、「文鋒四件ノコトヲ申上グ」云々(槐記)とあり、家熙撰『文房四賢』が成る。「題文房四賢并序／余性頗愛翰墨、近来 朝政少暇、或於揮灑摸臨之時不遑心在筆先、每患亥家、

舛錯鉛黄紊乱、因新製四品、若書誤筆則刀以削之、紙生毛則糊以濡之、燥之以溫器、磨之以研光瑩潔光滑、莫覩一点塗汚之跡矣、遂擬古之四君子称曰四賢、各立姓名、一日四賢侍立謂余曰、吾儕非才、叨辱柄用、寵踰華袞、苟蒙不棄願得一言、姓名不朽再造之恩幸、亦莫加焉、余默不復言、于時毛玄穎与易処晦、正襟相揖而進曰、吁四賢之才、太美而力亦足矣、其翰苑墨池之遊、不可斯須離焉、豈可悒記其才狀乎哉、於是煩二秀才以喚起楮国公・虚中子、各賦詩一章以塞其需云、

劉司空^{字去非}／鐵嶺人／却兵即墨独専城、筆陣縱横自肅清、当是文房功第一、亦知竹帛可垂名

胡補闕^{字補之}／管城人／出身当日已登瀛、将沐恩波入管城、莫道絲毫無所補、応教膏沢及蒼生

温平章^{字名補}／廬州人／銀博山頭帶暖婦、金花城上報春暉、和熙陣力何為苦、遮莫糊塗露未晞

牙光祿^{字名補}／象郡人／桂林才子建高牙、好是騷壇功不誇、楮国平来磨砺力、詎辞表德独称華。のち墨拓として出版。(槐記・センチュリー文化財団蔵『豫楽院文房四賢并序』ほか)なお、この詩に新井白石が「謹賦撰政大相国殿下文房四賢之詩」と題する詩を和している。

●七月九日、鹿兒島藩京屋敷留守居役の向井四郎右衛門が来邸し、御合力として金二百五十両を贈られる。(雑事日記)

●七月、『大唐六典』の序文を執筆。「姫周已降、憲度文物之明設官分職之備、特以李唐為盛、而六典乃経衆賢討論、以成於開元全盛之日、一代之制粲然、可見、我朝每有造因置廢脩飾理化、亦未嘗不參而徵焉、其書也中罹乱燬燼湮没、為日既久而近更因舶伝以得之、第得之、不多行之、不広耳、徒聞而目未覩者、

往々而是府内適有一本、不無刁刀魚魯、予辱塩梅之日、休沐必読之如有遺脱必乙其倫、今也辞職処河之湄、参互群藉手加校正、既而卒業乃出以授于梓、冀与公卿大夫稽古制典、欲以仰賛皇猷之万一者共焉、若夫律令格式之為編、或有完而存者、或有存而欠者、或有全然不伝者、異日幸得四者之備、以与是書同就刊布則其補乎、世亦将何以哉、予嘗為之措志而有俟云／享保甲辰秋七月／従一位家熙『《大唐六典》』

●八月二十日、明・謝在杭『《五雜俎》』の作者、旧蔵の『集韻』を入手。(槐記)

●八月二十九日、中御門院より書写(詳細不明)の命が下る。(雑事日記)

●九月九日、法事料(常子内親王の法要か)として大徳寺へ銀三十枚を贈る。使者は神坂自休(もと基熙附近習か)。この時、天英院も法事料として白銀百枚・常子内親王香奠として銀三枚を大徳寺へ贈っている。(雑事日記)

●九月十四日、唐・白居易撰『新楽府』のうち、「七德舞」・「海漫漫」・「上陽人」を行書体で書写。(個人蔵)

●九月二十二日、「奇代ノ珍書」(詳細不明)を入手。(槐記)

●九月、『一様庵清規』を書写。白毫山一様庵(現称は一様院。京都市北区大宮薬師山東町)は黄檗宗の尼寺。開山は近江・大津四宮(天孫神社)の神官滋賀氏の娘隱巖衍真尼で、もとは常子内親王に仕えた女房。(秘鈔・遺墨・『黄檗文化人名辞典』)

●十月五日、河原御殿の数寄屋で口切りの茶の湯を催す。客は刑部大輔連藤長之・久米元察・久田宗也。(御茶湯・他所)

●十月十日、茶の湯を催す。客は吉田幸節及び治部大輔今大路孝在。(御茶湯)

●十月十二日、下岡崎の家熙別業又得庵での茶の湯に参加。亭主は百拙元養。相伴は右京権大夫錦小路頼庸及び刑部大輔進藤長之。(他所)

●十月十四日、刑部大輔進藤長之・左馬頭進藤長富とともに大徳寺塔頭の龍光院へ出掛け、墨蹟などの什物類を見る。(雑事日記・他所)

●十月十六日、上岡崎の右京権大夫錦小路頼庸別業での茶の湯に参加。相伴は刑部大輔進藤長之及び山科道安。(槐記・他所)

●十月十七日、茶の湯を催す。客は百拙元養及び九峯自端。(御茶湯)

●十月十八日、午後、刑部大輔進藤長之宅での茶の湯に参加。相伴は右京権大夫錦小路頼庸・山科道安。(槐記)

●十月十九日、茶の湯を催す。客は御菌意齋及び山本恕軒。(御茶湯)

●十月二十一日、茶の湯を催す。客は右京権大夫錦小路頼庸・左馬頭進藤長富・松井主殿。(御茶湯)

●十月二十三日、午刻、茶の湯を催す。客は深諦院及び山科道安。(御茶湯・槐記)

●十一月二日、西王寺での茶の湯に参加。亭主は九峯自端。相伴は百拙元養及び刑部大輔進藤長之。(他所)

●十一月六日、茶の湯を催す。客は上田養安及び山科道安。(御茶湯・槐記)

●十二月一日、茶の湯を催す。客は前権大納言坊城俊清・前権中納言六条有藤・法眼木下承順(道正庵)。(御茶湯)「承順義、豫楽院様へ御茶湯に被招、御親く」云々(雑事日記)とある道正庵木下家は、新町通寺之内上ルで家伝の靈藥「解毒丹」を販

売する薬舗。曹洞僧が出世や禪師号を賜る時は必ず道正庵に寄寓せよとの道元の遺言があるとされ、木下家の代々は曹洞宗との縁故が極めて深い。(雑事日記・『京羽二重織留』・黒川道祐『雍州府誌』・堤邦彦氏『江戸の高僧伝説』)

●十二月二日、茶の湯を催す。客は法金剛院照山及び太秦の自性院僧正。(御茶湯ほか)

●十二月七日、午刻、治部大輔今大路孝在が御茶献上。相伴は右京権大夫錦小路頼庸及び山科道安。(槐記)

●十二月十八日、午刻、刑部大輔進藤長之宅での茶の湯に参加。相伴は右京権大夫錦小路頼庸・山科道安。(槐記)

●十二月二十四日、弘前藩主津軽家より御助力料として金七十五両を贈られる。(雑事日記)

★此年、『唐書』「遜思邈伝」の一節「胆欲大而心欲小、智欲円而行欲方」を絹地に書写して山科道安へ贈る。現存。(槐記・個人蔵)

享保十年(一七二五)乙巳 五十九歳

●一月七日、御茶湯始。客は久米元察・刑部大輔進藤長之・久田宗也。(御茶湯・他所)

●一月九日、歳旦の詩を賦す。「一事無成又添歳、群方脱却出群方、迎春偶至緑衣客、午睡覚来梅更香」(槐記)

●一月十二日、百拙元養・山科道安らと「聯ノ掛合」を行う。家熙賦「梅津梅。梅畑梅。八重紅。一重白。都栽梅壺。但馬馬師但馬引前。対馬馬粧対馬騎後」(槐記)

●二月一日、夜、茶の湯を催す。客は一乗院宮尊昭親王・百拙元養・一乗院宮諸大夫の但馬守中沼秀興。(御茶湯)

●二月七日、鹿兒島藩主の大隅守島津繼豊より唐紙百枚や唐墨三挺などを贈られる。(雑事日記)

●二月九日、石見守中川長堅宅(河原御殿にあつた諸大夫長屋のうち)での茶の湯に参加。相伴は御蘭意斎及び刑部大輔進藤長之。(他所)

●三月二日、宝鏡寺門跡の花屋理春尼(近衛尚通の娘)百五十回忌に際し、同寺より赤飯一盞を贈られる。(雑事日記)

●三月十二日、茶の湯を催す。客は一乗院宮尊昭親王・百拙元養・法印内侍原恭専。(御茶湯)

●三月二十八日、丹後・田辺(舞鶴)藩主で京都所司代の佐渡守牧野英成が今出川の近衛家本邸に来邸。大書院で対面し、茶菓を贈る。(雑事日記)

●四月二日、御風炉始。客は上田養安及び御蘭意斎。(御茶湯)

●四月三日、近衛家への出入りを願っていた大坂の高嶋屋(浅井)源三郎より、奉書紙二束及び扇子五本を贈られる。(雑事日記)

●四月五日、東福寺塔頭の高蔵院で行われる伏見宮貞致親王御息所の好君(微妙広院。近衛信尋の娘)五十回忌の法要に際し、経を奉納。(雑事日記) 海蔵院には好君のほか、近衛尚嗣室の女二宮昭子内親王(後水尾院皇女。法号は光明心院寂照尊常大禅定尼)の墓もある。(寺田貞次氏『京都名家墳墓録』)

●四月十日、茶の湯を催す。客は刑部大輔進藤長之及び久田宗也。(御茶湯・他所)

●四月二十二日、近衛家への出入りを願っていた堺の酒造家中倉源六より、奉書紙二束及び扇子三本を贈られる。(雑事日記)

●五月十八日、正午、刑部大輔進藤長之宅での茶の湯に参加。

相伴は治部大輔今大路孝在及び山科道安。(槐記)

●八月七日、辰刻、尾張藩主の権中納言徳川継友御簾中となつていた安己君、江戸の尾張藩市ヶ谷屋敷で没、享年二十二。法号、光雲院高巖永照大姉。江戸の天徳寺に葬られる。西王寺にも墓が現存。(雑事日記・『陽明家系譜』・『徳川諸家系譜』ほか)

●八月十八日、仙台藩主伊達家より、「喪中訪問」として連歌師猪苗代兼郁を介し素麺一箱を贈られる。(綿拔豊昭氏『近世猪苗代家の研究』安己君の逝去に関連するものであろう。)

●十月八日、口切りの茶の湯を催す。客は刑部大輔進藤長之及び久田宗也。(御茶湯・他所)

●十月十一日、茶の湯を催す。客は一乗院宮尊昭親王・百拙元養・上総介中沼秀延。(御茶湯)

●十月二十六日、大徳寺へ出掛ける。翰松院(看松庵)で狩野尚信などの絵画を見、住持大梅宗円より献じられた食事を摂る。食後寸松庵へ出掛け、茶の湯に参加。亭主は龍巖宗棟(大徳寺二百八十七世・寸松庵五世)。相伴は百拙元養及び刑部大輔進藤長之。喫茶後、孤篷庵へ出掛ける。(雑事日記・他所) おそらくこの時であろう、家熙は寸松庵所蔵の小堀遠州寄付の茶釜を見て気に入る、翌年春にこの茶釜を借り出して釜屋新三郎に写させている。新たに写した釜は、翌年十一月四日の茶事などに用いている。(槐記)

●十月二十九日、茶の湯を催す。客は治部大輔今大路孝在及び吉田幸節。(御茶湯)

●十一月十日、午刻、茶の湯を催す。客は深諦院及び山科道安。(御茶湯・槐記)

●十二月五日、午半刻、茶の湯を催す。客は上田養安及び山科

道安。(御茶湯・槐記)

●十二月七日、茶の湯を催す。客は竺嶺宗伍(大徳寺三百十四世・芳春院八世)・龍巖宗棟。(御茶湯)

●十二月九日、茶の湯を催す。客は孤蓬庵住持の太玄宗珊・大梅宗円・透首座。(御茶湯)

●十二月十一日、茶の湯を催す。客は左馬頭進藤長富及び松井主殿。(御茶湯)

●十二月十三日、茶の湯を催す。客は法眼木下道正庵承順及び御菌意斎。(御茶湯)

●十二月十八日、准三宮宣下の内意が伝えられる。(槐記)

●十二月二十一日、准三宮宣下。(家譜)

●十二月二十四日、洛東吉田の春日社へ参詣(生涯で一度も奈良の春日社へ参拝することがなかった)。未半刻に帰宅し、即座に出家。法号、豫楽院真覚(全て自身の考えによるもの)。

既に一乗院門主(当時は尊昭親王が門跡)より受戒していたが、出家は「御隠蜜」(秘鈔)で行われ、周囲の人々は、「他所共に驚入」(同上)だった。なお、この日准三宮辞退を申し出た

が、許されなかった。(家譜・秘鈔・『続史愚抄』同日、刑部大輔進藤長之が出家(いわゆる相伴落飾)。法号、一葉。(他所・『地下家伝』)

●十二月二十六日、『般若心経』を行草体で書写。(遺墨)

享保十一年(一七二六)丙午 六十歳

●一月一日、歳旦の詩を三首賦す。また、この日以後、諸大名からの式正の礼物や寒暑の献上品を謝辞する旨が伝えられ、返品された品もあった。ただし場合によっては受け取っており、

必ずしも全て謝辞したわけではなかったらしい。(槐記)

●一月七日、御茶湯始。客は進藤一葉及び久田宗也。(御茶湯・他所)

●一月十日、茶の湯を催す。客は裏千家六世の六閑斎千宗安及び山本恕軒。(御茶湯)

●一月二十二日、茶の湯を催す。客は九峯自端及び松林院。(御茶湯)松林院の伝については未詳。ただし、『槐記』享保十三年三月十九日条に「下鴨松林院」、また「亭坊ハ茶人ナリ」とあり、茶の湯に通じてた人物だったらしいことがうかがえる。

●一月二十三日、午下刻、左馬頭進藤長富宅での茶の湯に参加。相伴は広瀬外記及び山科道安。(槐記)

●二月九日、暮六ツ半、石見守中川長堅宅での茶の湯に参加。相伴は吉岡局・於秀・山科道安。(槐記)

●二月十一日、正午、進藤一葉宅での茶の湯に参加。相伴は深諦院及び山科道安。(槐記)

●二月十三日、吉田幸節が御茶献上。相伴は進藤一葉。(他所)

●二月二十日、下岡崎の家熙別業又得庵へ徒歩で出掛け、百拙元養が亭主の茶の湯に参加。相伴は進藤一葉・九峯自端・山科道安。帰りに右京権大夫錦小路頼庸宅へ立ち寄る。この時に和歌一首を詠ずる。(槐記・他所)

●二月二十四日、午刻、茶の湯を催す。客は深諦院及び山科道安。(御茶湯・槐記)

●二月二十八日、上田養安が御茶献上。相伴は進藤一葉及び山科道安。(槐記)

●三月五日、正午、久田宗也が御茶献上。相伴は進藤一葉及び山科道安。(槐記・他所)

●三月八日、家熙の六十賀が今出川の近衛家本邸で催される。

近衛家の人々のほか、門流の公家も参加。家熙は本邸に明六ツ半に出掛ける。五ツ半より能が開始。この六十賀は近衛家の先祖である藤原忠実の七十賀に倣ったもので、家熙へ贈られた御衣・御袈裟（一乗院が調進）・四つざし（数珠袋状で中に水晶の数珠入り。桃の作り枝が添付）・銀造りの橋・馬一頭などもまた、忠実の七十賀の祝儀に準じている。（家久・槐記）

●三月九日、一乗院より調進の袈裟に關連し、和歌一首を詠ずる。（槐記）

●三月二十四日、治部大輔今大路孝在が御茶献上。場所は河原御殿の数寄屋。孝在を亭主としたのは家熙の指名による。相伴は進藤一葉及び山科道安。（槐記・他所）

●三月二十五日、嵯峨・大覚寺へ花見に出掛ける。供は進藤一葉・牧如石（近衛家諸大夫の北小路俊里の法号）・山科道安。（槐記）

●三月二十七日、御風炉始。客は上総介中沼秀延及び御菌意斎。（御茶湯）

●四月十一日、茶の湯を催す。客は進藤一葉及び久田宗也。（御茶湯・他所）

●四月十三日、午過ぎ、御菌意斎が御茶献上。相伴は石見守中川長堅及び山科道安。（槐記）

●四月十九日、午過ぎ、松井主殿が御茶献上。相伴は御菌意斎及び山科道安。（槐記）

●四月二十一日、午半刻、茶の湯を催す。客は上田養安及び山科道安。（御茶湯・槐記）

●五月一日、午半刻、進藤一葉宅での茶の湯に参加。相伴は深

諦院及び山科道安。（槐記）

●五月七日、茶の湯を催す。客は前権大納言坊城俊清・前権中納言六条有藤・参議高辻総長。（御茶湯）

●八月三日、『黄帝内経類纂約註』及び清・汪昂撰『本草備要』を、山科道安に贈る。これらの書籍は、この年清国より舶載され、購入した『陸氏全書』（八十冊）に含まれていた。（槐記）

●八月二十六日、常子内親王二十五回忌に際し、靈元院より菓子一折を贈られる。（雑事日記）

●九月十二日、水戸藩（水戸藩京屋敷留守居役の柴田次郎右衛門）へ『旧事記』及び『古事記』の借用を申し出る。（雑事日記）

●十月六日、昼、東本願寺法主邸に出掛ける。供は進藤一葉及び山科道安。この時、新小座敷で濃茶（深諦院の給仕）を、また囲居で薄茶（深諦院が点者）を喫する。（槐記）

●十月九日、昼過ぎ、今出川の近衛家本邸で催された口切りの茶の湯に参加。供は山科道安。（槐記）

●十月十二日、青蓮院宮尊証親王三十三回忌に際し、青蓮院へ納経。（雑事日記）

●十月二十一日、口切りの茶の湯を催す。客は進藤一葉及び久田宗也。（御茶湯・他所）

●十月二十三日、山科道安の子一安と初めて対面し、紗綾一卷を贈る。（槐記）

●十月二十五日、茶の湯を催す。客は一乗院宮尊昭親王・百拙元養・法印高天好章。（御茶湯）

●十一月四日、茶の湯を催す。客は深諦院及び山科道安。（御茶湯・槐記）同日、興福寺の役僧らが今出川の近衛家本邸に来

邸し、大書院で奈良・春日社の本地仏五体、天灯・龍灯、狛犬など合わせて長持四棹分を開帳。これに関連して、白銀五枚を奉納。(雑事日記)

●十一月六日、有隣軒鷹司輔信邸での茶の湯に初めて参加。相伴は御菌意斎及び進藤一葉。(槐記・他所) 鷹司輔信は前関白鷹司房輔の息子。法号、輔信。若年期に眼病を患って失明するも、梶井宮(常修院宮) 慈胤親王に茶を学ぶ。「御盲君にて御生涯茶道を好ませられ、茶湯とだにいへば如何なる賤が家へも成せられ、物に心得たる近士、御介副にて、路次の風流、茶室のしつらひ、掛物、生花茶器迄審に申上る、御盲人ながら、茶道御功勞者にて、御客振やことなく」云々(神沢杜口『翁草』)などと評されており、盲目の茶人として著名。『翁草』・山口吉郎兵衛氏『茶人 鷹司輔信』

●十一月七日、大徳寺塔頭の芳春院及び孤篷庵へ出掛け、孤篷庵での茶の湯に参加(亭主不明)。相伴は進藤一葉及び山科道安。また孤篷庵内にある書院直入軒で表千家六世の覚々斎千宗左及び同家七世の如心斎千宗員と初めて対面。両名は以前から家熙への対面を願ひ出ており、この日一葉の仲介で実現した。覚々斎は炭手前を行い、如心斎は薄茶を点てた。(槐記・他所・『日本の茶家』)

●十一月十日、夜、十種香を三座行う。香本は吉岡局・於秀・笹(女房か)がつとめる。(槐記)

●十一月十一日、午刻、進藤一葉宅での茶の湯に参加。相伴は治部大輔今大路孝在及び山科道安。(槐記)

●十一月十三日、茶の湯を催す。客は御菌意斎及び山本恕軒。(御茶湯)

●十一月十六日、茶の湯を催す。客は上田養安・山科道安・表千家六世の覚々斎千宗左。(御茶湯・槐記)

●十一月十七日、茶の湯を催す。客は法金剛院照山・太秦の自性院僧正・薩摩の僧願王院。(御茶湯ほか)

●十一月二十日、茶の湯を催す。客は九峯自端及び松林院。(御茶湯)

●十一月二十四日、茶の湯を催す。客は大徳寺塔頭の寸松庵(龍巖宗棟か)・孤篷庵(太玄宗珊か)・芳春院(竺嶺宗伍か)。(御茶湯)同日、詩十首巻物(詳細不明)の書写を命ぜられる(中御門院よりか)。(雑事日記)

●十一月二十七日、有隣軒鷹司輔信邸での茶の湯に参加。この日の茶は聞香を取り入れた香の茶事。家熙も点てた。相伴は自在軒土肥二三及び絵師の山本数馬。(御茶湯・槐記) 土肥二三(三河・吉田藩主牧野家に仕えた武士。のちに出家、京の岡崎に住んだ。有楽流の茶人でもある。一方、山本数馬は江戸時代前期に活躍した狩野派の絵師山本内蔵丞(友我)の末裔。宝永新築の内裏に用いられた障壁画の筆者に、数馬は名を連ねている。(伴蒿蹊『近世畸人伝』ほか)

●十一月三十日、男児誕生。母は於秀。幼名は岩君。岩君が家熙の末子となる。(雑事日記・槐記)

●十二月五日ごろ、明版(正徳本)『唐六典』を入手。これまでは同じ明版であっても嘉靖本しか所持しておらず、校合が捗らないことも多々あったらしい。正徳本の入手について「此嬉シサ。昼ハヒメモス。夜ハ夜モスガラ寝ラレズ。六十二余リテ。是程ノ嬉シキ事ハナシ」と述べている。(槐記)

●十二月十八日、毎年恒例となっていた年忘れ参加のため、今

出川の近衛家本邸へ出掛ける。(雑事日記)

●十二月二十三日、鹿児島藩より桜島蜜柑が贈られる。桜島蜜柑は家熙の「御賞翫」のものであった。(雑事日記)

●十二月二十六日、行草体で『般若心経』一卷を書写。(大覚寺蔵・京都国立博物館『古写経―聖なる文字の世界―』展図録)のちに墨拓本として出版。(『近衛家熙公遺墨展覧会目録』)

●十二月大晦日、山科道安・吉岡局・於秀・笹とともに十種香を行う。(槐記)

〔以下つづく〕

〔凡例補足〕

本稿で用いた資料のうち、以下の三点について補足する。

①『御茶湯之記』(原本陽明文庫蔵)は、『豫楽院公 茶杓筆筭』(淡交社、昭和四十八年)所収の付録で、『御茶湯之記』をもとに名和修氏が作成された『豫楽院自会記』に基づく。

②『近衛家取次所日記』の原本は、陽明文庫に所蔵されている。

③所蔵先のうち「センチュリー文化財団蔵」とした資料は、慶應義塾大学附属研究所斯道文庫へ寄託されているものである。

(みどりかわ あきのり・日本学術振興会特別研究員PD)